

在日コリアン二世の映画監督ヤン・ヨンヒが、自分のオモニ（母親）の生涯をたどったドキュメンタリーである。オモニはアボジ（父親）とともに朝鮮総連の熱心な活動家だった。アボジは北朝鮮から勲章をもらうほどで、平壤の墓地に眠っている。

ヨンヒと兄三人は朝鮮学校で民族教育を受けた。家庭内で北朝鮮を批判することは許されな

スープとイデオロギー
(日・2021)



スープとイデオロギー



かった。ヨンヒは民族教育の内容にうんざりしながら、学校では優等生を演じた。兄たちは一九七一年に再開された「帰国事業」で全員北朝鮮に渡った。中でも長兄は、金日成の還暦（一九七二年）を祝う「人間プレゼント」とされた。要するに人身御供である。両親は多額の借金までして息子たちに仕送りをした。なぜ両親はここまで北朝鮮を信じたのか。オ

モニは大阪で生まれ育った。大阪の在日社会にあつては、南北どちらかを選ばなければならなかった。オモニの両親の出身地は済州島なのに、なぜ北を、と不思議に思った。だが、だから北を選んだのだとやがてわかっていく。

アジア太平洋戦争末期に大阪は度重なる空襲にさらされた。まだ二〇歳にもなっていないオモニは幼い弟妹を連れて済州島に疎開する。そこで終戦となる。まもなく朝鮮半島は南北に分断される。一九四八年四月三日、

済州島でそれを固定化する選挙実施に反対する民衆が武装蜂起する。韓国で長年タブー視されてきた「済州四・三事件」である。武装蜂起集団が北朝鮮の影響下にあるとみた韓国軍や警察は、徹底的な島民殺戮を行う。犠牲者は島民の一〇分の一にあたる二万五〇〇〇人から三万人

と推定されている。まさに地獄絵図をくり抜いた。オモニは弟妹とともに命がけて日本への密航船に飛び乗った。

当時の韓国は李承晩大統領による軍事独裁政権だった。オモニの原体験からして韓国を支持する余地はなかったのである。これについてオモニが重い口を開きはじめるのとはほぼ同じ頃、オモニはアルツハイマー病を発症する。とうに

世界したアボジが生きていることになってオモニの話に出てくる。

オモニは韓国政府から一回限りのパスポートを発給されて、二〇一八年四月三日の「四・三事件」の追悼式に出席することになる。オモニ、ヨンヒ、そしてヨンヒの夫の三人で済州島の土を踏む。病が進んだオモニは多くを語らない。それを慮るヨンヒの表情につらさがにじむ。映画は、オモニが亡くなったあと遺骨を平壤の墓にどうやって葬るかで悩むヨンヒを映して閉じられる。オモニは今年一月に死去した。

ヨンヒが夫といっしょに、オモニの自宅に飾られている、重厚な額縁に収められた金日成・金正日の顔写真を撤去する。一方で、病に冒されたオモニが北朝鮮の革命歌を歌う。この二つのシーンが好対照をなしている。写真も歌もイデオロギーを刷り込むツールだ。

そして、タイトルにある「スープとイデオロギー」こそ、ヨンヒの育った家庭の風景だったことに気づかされた。鶏の内臓をすべて取りだしてそこにニンニクを四〇個詰めて長時間煮込むスープを、オモニは得意料理としていた。私には食べられません。鶏肉は苦手なので。(二〇二二年六月二四日・ユーロスペース) (にしかわ・しんいち／明治大学教授)